

芦生研究林の自然 VRで

舞鶴高専(舞鶴市白屋)のHANDMADE部が、京大芦生研究林(南丹市)の魅力伝えるとともに、シカの食害による植生の危機を訴えるVR(仮想現実)動画を制作した。「ツアー編」「鹿害編」「魅力編」の3本からなり、各3~4分。専用ゴーグルで周囲360度の景色を見ることができ、実際に森の中を歩く感覚を味わえる。【塩田敏夫】

舞鶴高専生が制作

魅力や現状伝える動画3本

芦生研究林は福井県と滋賀県に接する府北東部に位置する。由良川の源流域にあり、面積は約4200畝(東京1ム8008個分)。原生ナナ林が残り、貴重な動植物が多く生息している。年間約3000人の学生や研究者が来

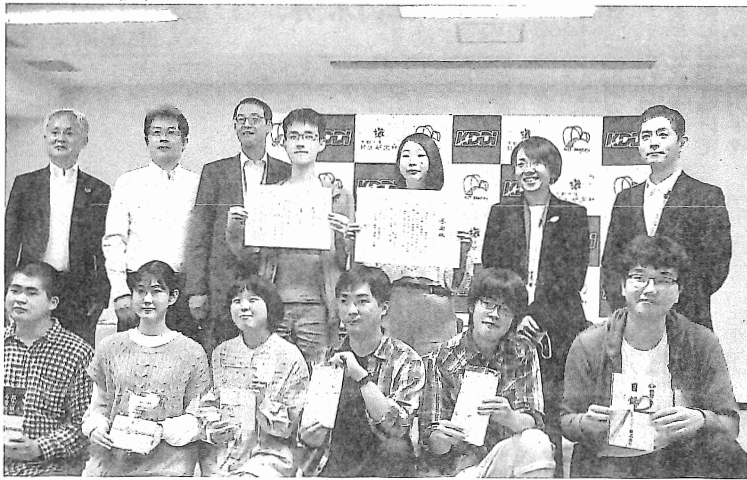
習、研究のために利用し、一般市民にも開放されている。しかし、コロナ禍が続く中、一般向けのガイドツアーの利用は減っており、京大では改めてこの研究林の魅力と現状を広く伝えようと、VR動画を制作を舞鶴高専に依頼した。

通信大手のKDDIが画者を仲介し、機材を提供するなど連携・協力した。3Dモデルなど多様な分野のものづくり好きの学生有志が集まるHANDMADE部(第8管区海店保安本部(本部・舞鶴市)の依頼でミニポルトの運営)について注意喚起する動画を制作するなどの実績がある。部員たちはコロナ禍で登校制限がある中、現地を贈った。

京大で披露し感謝状



芦生研究林のシンボルの大カツバシカに覆われた芦生研究林のシカの食害が深刻化している芦生研究林。いずれも京大芦生研究林提供



感謝状を贈られた舞鶴高専HANDMADE部員ら—舞鶴市白屋の舞鶴高専で

に足を運ぶなど1年かけてVR動画を完成させた。「ツアー編」は研究林のシンボルである大カツバシカによる食害の深刻さを伝える。「魅力編」では四季折々の姿を見せる。いずれも臨場感はたっぷりだ。

無断転載禁止

※毎日新聞社許諾済み